

レコードクリーニングの決定版！？

通常は手回しの disco-antistat で 50 回転（1 回に半回転なので 100 回）させてお終いなのですが、たまにパチッというノイズが残る盤があります。

例えば CHARLES MINGUS の “MINGUS AH UM” (COLUMBIA)

ふと、この disco-antistat のクリーニングブラシが太くて、レコード溝の奥底までクリーニング出来ていないのではないかと気付きました。

このブラシは洗浄槽の中央にあり交換出来るような代物ではありません。

耐久性重視でブラシの毛先が太く、レコード溝の浅い部分までは毛先が届くんだけど、奥底までは届かないのかもしれない。

それでは一体レコード溝のどの位の深さまで毛先が届けばいいのか？

それは「アナログディスク再生」から「モノラル・ステレオレコードとカートリッジ・フォノイコのマッチング」の 2 頁目の図をご覧ください。

丸針の場合、ステレオ針の針先の半径が $16.5\mu\text{m}$ なので、針先がレコード溝と接する 2 点間の水平距離は $16.5\mu\text{m} \times \sqrt{2} = 23.3\mu\text{m}$ となります。

これより細い毛先なら概ねレコードの音溝清掃はうまくいくのではないのでしょうか。

そんな都合のよいブラシが一体この世の中にあるのか？ 有り難いことにそれが存在するのです！

マニアの間ではよく知られているライオンの「デンターシステム」という歯ブラシです。

「 $\phi 0.02\text{mm}(=20\mu\text{m})$ 特許技術 超極細毛」です。

いろいろなタイプがありますが、歯を磨くわけではないので「4 列 大きめヘッド 硬さはふつう」を選択します。価格は 200 円前後です。

試みにレコードをターンテーブル上で回転させ、この歯ブラシをレコード溝に押し当ててみますと、毛先がレコード溝に入っていることが実感出来ます。

しかしこれでは、おそらくレコードプレス時の残留剥離剤（油成分？）によると思われるパチッというノイズは除去出来ません。どうしても本格的な洗浄をする必要があります。

それでは具体的な洗浄方法です：

- 1 まず disco-antistat でレコードを 10 回転(=20 回)させて洗浄液をレコード溝に行きませます。
- 2 次にレーベルカバーを外し、キッチンペーパーなどをテーブルに敷いてレコードを載せます。

- 3 デンターシステム歯ブラシに（歯磨き剤ならぬ）台所用中性洗剤をつけ、レコードの円周方向にまんべんなくブラッシングをします。
ブラッシングし忘れる部分があるかもしれませんが、ご愛嬌です。
- 4 レコード両面のブラッシングが終わったら、再びレーベルカバーを付けて水道水で中性洗剤を洗い流します。
この時、レコード盤がいかに水をよく弾くか驚かれることでしょう。
- 5 水道水での洗浄後、再び **disco-antistat** で 10 回転させます。
これは **disco-antistat** の洗浄液には静電気防止剤、界面活性剤などの添加物が入っていて、これらが有用だからです。
- 6 **disco-antistat** の乾燥台で乾燥させます。

なお余談ですが、**disco-antistat** の洗浄液が減ったら、無水エタノール(1000 円前後)、コンタクトレンズ用精製水(100 円前後)、富士写真のドライウエル(これは印画紙用の界面活性剤で 350 円前後) を適宜補充すればよいと思います。

これで目出度くパチッというノイズから解放され、心ゆくまでレコード演奏を楽しむことが出来ます。

以上